

## 〈小説〉としての『紅樓夢』

### —— 〈続書〉群とその展開をめぐる ——

真 島 千恵子

#### はじめに

今日、〈文学〉の領域における概念の多くが、これまで我々にとって無自覚に前提となってきたそのありように疑問が呈されているように思われる。多くの論者によって発せられてきた種々の問い——〈作者〉とは何か、〈作品〉とは何か、そして〈文学〉とは何かといった問いかけは、そのような状況を端的に示していると言えるものであるが、それは〈文学〉の領域に留まるものではないであろう。むしろそのような枠組みとしてのそれらが担った位置／意味こそが問われているのだから。そしてそれは、何らの価値判断を含まない無垢で透明な、「自然な」ことばとしてそれらを想起すること、あるいはそれらに本質主義的な「実体」を付与しうると考えることは、危険ですらあるだろう。

しかし、〈小説〉という〈文学〉形態に対して、我々はそれがすぐれて〈西欧近代〉の所産であるとの認識を有するにもかかわらず、現在に至るまでそれがいかに普遍的なものとして語られ規範化されてきたかということがあまり問題とされて来なかったように思われる。それは、〈小説〉なる語が、一義的に〈近代小説〉を指向する状況が支配的な現在においてこそ、問われる必要があるのではないだろうか。そしてさらには、そのような意味と価値の摂取と内面化を緊急の要件としてきた、〈近代化〉の過程とも通底して考えられねばならないであろう<sup>1)</sup>。

本稿では、中国文学における〈小説〉の名を有するジャンルに対して、〈近代小説〉が（その「普遍的」存在では決してない、むしろ）「歴史的」存在としての存立を隠蔽することによって如何に規範化しているかを、現在学問的にはほとんど顧みられることなく捨象されてきた〈続書〉という現象に注目することを通じて考えて行きたいと思う。

奇しくも、同じ18世紀に（辛うじて同じ節目の中に）、洋の東西においてそれぞれに重要な意味をもつことになる〈小説〉が生み出された。『紅樓夢』（1791年刊）

と、『ロビンソン・クルーソー』(1719年刊)がそれである。両者は、その成立の契機や過程を他方に負っている、すなわち直接的影響-受容関係にあったわけでも、物語の展開に類似点があるわけでもない<sup>(2)</sup>。にもかかわらず、本稿においては、両者を対置／並置することが主要な方法となるが、それはそのような東西文化の重要な交錯としての関係を措定しようとするからではなく、それぞれを起点とした続作／改作の連鎖が存在し、互いにそのありようを照射する現象として捉えることができると思われるからである。

## 1 『ロビンソン・クルーソー』と改作群

現在の我々にとって〈小説〉とは、アーノルド・ケトルによる「それ自体完結した、ある一定の長さをもつ散文の虚構作品」<sup>(3)</sup>という定義がそのまま一般的に受け入れられるような〈文学〉のジャンルであると言うことができる。そしてそれは、マルト・ロベールが、「とりわけイギリス革命から出たブルジョワ・商業階級の諸傾向をきわめて明確に反映している」<sup>(4)</sup>と強調した『ロビンソン・クルーソー』をこそ始原のひとつとして持っているような、すなわちすぐれて「近代」の所産であることもまた、しばしば指摘されることとなっている。換言すれば、〈小説〉とは、〈(西欧)近代〉との根深い同形性によって位置づけられねばならないと言えるだろう。それと同時に『ロビンソン・クルーソー』がそのような「歴史的」存在としての〈近代小説〉と不可分のものとして生まれ、逆にそれを特徴づけることに寄与したものとも見ることできると思われる。

『ロビンソン・クルーソー』は、周知のようにイギリスの作家ダニエル・デフォーの作で、1719年に刊行されて以来、現在に至る二百数十年の間に、ヨーロッパの中に留まらない広い地域で読まれてきた。そして、ここで取り上げる上で重要なのは、この小説が、流布して行く過程で多数の改作を生み出していったということである。

ここでの〈改作〉とは、原-作者であるデフォーではない他者の手で行われた改変・翻案である<sup>(5)</sup>。この現象をM・グリーンはメタ・レベルの「ロビンソン物語」と呼び、その連鎖と変動を跡づけている<sup>(6)</sup>。それは古くはシュナーベルの『フェルゼンブルグ島』(1731年)から、カンペの『新ロビンソン』(1779年)やステューブソンの『宝島』(1883年)、ヴェルヌの一連の作品、等を経て、トゥルニエ(『金曜日あるいは太平洋の冥界』、1967年)やクッツェー(『敵あるいはフォー』、1986年)ら現代の作家をも貫く、連綿とした系譜を形作っているのである。

グリーンが、『ロビンソン・クルーソー』の改作の連鎖を「ロビンソン物語」として語ることができるとしたのは、それが〈近代〉と通底して変化し発展した、そ

れ自体でひとつの「物語」をなすものであるからである。ならば、その変化と発展とはどのようなものであったのか？

グリーンによれば、デフォーの原作の単純な「模倣」からはじまった改作は、それに対する「疑惑」を表明しさらに「風刺」するまでに至ったという。すなわち、『ロビンソン・クルーソー』にもとづいて、「技術」や「労働」、「生産」、「節約や目的合理性」といった行動規範や、それによって成り立つ「制度化」や「植民」が、物語として定式化されて行くが、さらに後にはそれがずらされ、嘲笑される対象となって行ったということである。

このように発展してきた改作の連鎖が、ヨーロッパの帝国主義的拡張、とりわけイギリスをモデルにしたそれと、これを可能にした社会経済力、そしてそこにこそ必要とされた想像力的・イデオロギー的形式を担ったものであることを、グリーンは指摘している。つまり「ロビンソン物語」それ自体が、「この二百数十年にわたって世界を騒々しく動かしてきた白人帝国主義・男性主義・産業資本主義の「神話的燃料」、帝国運営の「能力と気力の祭儀」テキスト」<sup>(7)</sup>であったことを示しているのである。

「ロビンソン物語」の持続力が、その帝国主義的イデオロギー性との連動、より広くは〈西欧近代〉への随伴ということにある、このように〈改作〉の連鎖という現象が理解され説明される一方で、そうした説明はこれと表裏をなす考え方に支えられている、ということも指摘されねばならないであろう。それは、「〈読者〉のテキスト生産への参与」ということであり、グリーンは明らかにその立論の骨子をそれに負っていると言えると思われるからである。つまり〈読者〉による意味創出、テキストに対して受容者である〈読者〉が（〈作者〉として関わっていくことで）示す能動性が、「ロビンソン物語」の連鎖において前提されているということである。

次のような言及もそれを示していると言える——「ロビンソン物語がきわめて純粹で持続的な類型であるために、一七一九年以降多くの作家たちは、同じ物語（同じ筋、同じ主題、同じ設定）を繰り返しながら、そこから無数の強力な意味付けを汲み出すことができた。」<sup>(8)</sup>

〈改作〉を生産する過程において、個々の作家は「先行作品から学ぼうとし、より洗練された改作を目指した」のであり、実際に「どの作家も先行作品を改善したと思っている」のであって、「しかも彼らがみなデフォーの物語に深く影響され、大多数がデフォー以後の改作に影響されていることは、疑問の余地がない」<sup>(9)</sup>。

ところが、個々の作家の「反応」として〈改作〉という現象を捉えること、グリーンに従ってそのように見てくるとき、『スイスの家族ロビンソン』という作品は、

確かにそのひとつでありながらそのような見方に裂け目を生じさせるような奇妙な位置をとるもののように思われる。というのも、この書物は、テキストや作者などの来歴が不明確であることがつとに指摘されており、そのことが「ロビンソン物語」の系譜を乱しかねない危険性をもっていると言えるのである。グリーンの見解は次のようになされる――

他の翻訳者・改作者たちも、この物語を取り扱う際には自由に先行作品から剽窃した。それゆえ十九世紀後半以後、子供たちが読んだ『スイスのロビンソン』は、まさに共同作品なのである。そして序文や出版社注記にある資料についての情報は、昔も今もほとんどあてにならない。[中略] ウィースの物語は『ロビンソン・クルーソー』よりもさらに無記名の公衆の財産だった。<sup>(10)</sup>

この物語は、スイス人聖職者ヨハン・ダヴィート・ウィースが子供たちに語って聞かせたものを、息子のルードルフが編集して1812年に刊行されたといわれている。その後も「決定的テキストが不在のままに英仏で勝手に翻訳＝改作され」<sup>(11)</sup>、「国際的集団創作の様相を呈していた」<sup>(12)</sup>という。筆者が目にするのできた2冊について見ても、一方はボストンの出版社による1893年刊行の英語版<sup>(13)</sup>であるが、序文にウィースの名を挙げてはいるものの、書名が従えているのは編者とも訳者ともつかぬ名前のみである。そしてもう一方も、ロンドンで出版されたものであることが分かるだけで、(出版年が記されていないことはまああることながら) 作者はおろか編者・訳者も記されていない<sup>(14)</sup>。

このような『スイスのロビンソン』に対して、グリーンが用いたことばは「剽窃」であった。しかし、彼自らが明らかにした、『ロビンソン・クルーソー』という、作者もテキストも疑いの余地なく確定された作品に対してその後継者を自認する人々が行った〈改作〉の歴史的展開において、そこに属する作品群はデフォーのそれに対する「剽窃」として糾弾されているわけではない。『ロビンソン・クルーソー』における改作、それを起源に持つことを暗黙に認めつつ書かれた作品は、「剽窃」の責めを受けるべき存在とは見なされてはいないのである。

ここには、これらが文学的威信をもたない、つまり文学の〈正典 canon〉ではない低次のものと見なされていたためというばかりではなく、〈近代小説〉を語る言説が関わっていると思われる。それによって『スイスのロビンソン』のありようは否定的に、すなわち「剽窃」として語られるのではないだろうか。

『スイスのロビンソン』に欠けているのは確定された作者とテキストであった。これ以外にグリーンが挙げている改作は、それぞれに〈作者〉と〈作品〉の対一

の対応が確定されているものと見なされている。つまり、「剽窃」ではない、ひとつの確固とした〈作品〉であるためには、そこに〈作者 author〉とその〈権威 authority〉が結実していなければならないのであり、「ロビンソン物語」がいくつもの〈作品〉の連鎖として了解されるためにはそのような機制が働かなくてはならないのと同時に、我々もそれを当然と見なしていることが、ここから逆に明らかになると言えるであろう。

〈創造者〉としての〈作者〉が、〈創造物〉としての〈作品〉を生み出すという図式、〈作品〉に対する〈権威／権利〉を行使し得る〈作者〉という機制は、近年では批評の側から積極的に解体され、その自明性に疑念が呈されているが、『スイスのロビンソン』が「ロビンソン物語」の流れに存在すること、そしてその〈作者〉〈作品〉の不確定性が特筆される状況それ自体が、これまでの規範的な〈小説〉理解を危うくする、そのいわば不安を露呈しているものと言えるのではないだろうか。

## 2 『紅樓夢』の〈続書〉群

『ロビンソン・クルーソー』の改作群が、〈読者〉が〈作者〉へと転じ、起源としての〈原作〉の圧倒的な影響のもとに改変・加工が施されてきた個々の〈作品〉の連鎖と捉えられるならば、清代中国といういわゆる前近代の社会に現れた『紅樓夢』の〈続書〉とはどのように表象されるのであろうか。

結論から言うならば、『紅樓夢』を稀に見る傑作とみなし、その意義は膨大な研究を以てしても汲み尽くし得ないほどに甚大であるという、現在の中国白話小説研究における一般的な評価を共有する限りにおいて、その〈続書〉現象は、メタ・テキストとしての「ロビンソン物語」と限りなく近似的に説明されるであろう。というのも、ここでもこのような『紅樓夢』評価と〈続書〉の位置付けを、〈近代小説〉という、現在支配的に機能している〈小説〉観が決定している、つまり、「ロビンソン物語」が属する説明原理が『紅樓夢』〈続書〉に無批判に適用されている状況がある、と思われるからである。

「ロビンソン物語」において、『スイスのロビンソン』という裂け目が、内部から〈改作〉連鎖の規範性を崩しているありようを前節に見てきたのだが、ここでは、『紅樓夢』においては規範的説明が恣意的な外挿として見えて来るような状況を示すことができると考える。

『紅樓夢』とは、清代中頃の乾隆56年（1791年）に刊行され、大変な人気を博した白話、すなわち俗語・口語体の〈小説〉である。作者は、曹雪芹という人物であることが（異説はあるものの）現在ではほぼ定説になっている。

刊本以前にはこの小説は、未完の写本で好事家の間に流行していたが、刊本は120回の章回から成る完本として出回った。このうちの前80回が実際に曹雪芹の手になる部分とされ、後40回は高鶚という人物の補作であるとされている。そして、刊本の刊行後、多くの続編・後日譚の類が30種近く現れたのであるが、これが〈続書〉という白話小説にしばしば見られた現象であり、『水滸伝』や『西遊記』など『紅樓夢』以前のものにも（広く知られたものには）少なからず現れていた。

『紅樓夢』の〈続書〉は、そのほとんどが最終の120回に続けた後日譚の形をとっており、悲劇的結末に終わった『紅樓夢』を、「団円（ハッピーエンド）」へ改変しているというほぼ共通した特徴をもっている。ここでは最初の〈続書〉である『後紅樓夢』を例にとって見てみることにする。

『紅樓夢』における悲劇とは、主人公・賈宝玉と林黛玉との悲恋、賈家の没落、宝玉の出家、という3点に集約されると言えるのだが、『後紅樓夢』はこれを、死者の生返りを自在にするような幻術といった手段を駆使して回復・修復して行く、という構造をもつ。

まず、宝玉の出家について、『紅樓夢』第120回は、僧形で父の前に現れた宝玉を描いている。

……船の舳先に当たって、雪明りのなかに、だれやら人の姿がほのかに望まれるではありませんか。頭は坊主頭、足は赤はだしのままで、猩猩緋の毛氈の斗篷を羽織ったくだんの男は、賈政に向かって平伏拝礼してゐるのでした。[中略] 正面からその顔を見ると、こはいかに、余人ならぬ相手は宝玉なのでした。[中略] 舳先に僧侶と道士の二人連れが姿を見せ、宝玉を両脇から挟むようにして、[中略] 三人揃って飄然と岸へ上がり、立ち去るのでした。賈政は大地の滑るのもものかは、いそぎあとを追いましたが、みすみすその三人が前方をゆくのを眼にしながら、なんとしても追いつけないのです。[中略] と、ある小さな坂を曲がったとたん、どこへ消えたか、一行の姿を見失いました<sup>(15)</sup>。

『後紅樓夢』は、第1回をこの場面に続けて、

さて、賈政は皆を引き連れて宝玉を追いかけたが、半里も行かないうちに、雪の中で宝玉を僧侶、道士の二人ともども捕まえ、宝玉を担ぎ僧侶、道士を縛り上げて船に連れ帰った。賈政の喜ぶことひとかたならず、すぐさま宝玉を立てさせて着物を換え、彼を問いただしたが、宝玉はまだ口がきけなかった。賈政は宝玉が薬を飲まされているのだと知り、家人に命じてオンドルで休養をとらせ

た。……（拙訳、以下同様）<sup>(16)</sup>

宝玉は騙されて拉致されたのであり、無事保護してさっさと衣服を取りかえさせているのである。ここでは僧形は、世間の目をごまかすための衣装でしかなくなっている。

また、宝玉と黛玉の悲恋について、『紅樓夢』では、2人は心中互いに結ばれることを望んでいたにもかかわらず、第98回で宝玉は欺かれて別の女性と結婚させられ、その婚礼の式のさなかに黛玉は病のために（そして宝玉の結婚を知り絶望して）息をひきとる。

突如黛玉が声を限りに、

「宝玉さん、宝玉さん、あなたはよく……」

と叫びましたが、その「よく」ということばまでいったきり、ぐっしょりと全身に冷汗をかいて、もうあとは声になりません。紫鵑らがすばやく手を貸して支え起こしましたが、汗がじくじくと出るにつれ、五体は段々と冷たくなってゆくのでした。[中略] そのうち黛玉の両の眼がひとたび返ると見れば、[中略] その刹那、黛玉は息を引き取りましたが、奇しくもそれは宝玉が宝釵を娶ったその時刻なのでした。

『後紅樓夢』はこの悲劇を修復すべく、まず黛玉を生き返らせるのだが、それにも僧と道士に責めを負わせている。

賈政は大いに驚いてどなりつけた。「こんなにたくさんの魂を取り込んで、八つ裂きの刑は免れまい」、二人が叩頭して言うには、「[中略] ただ木像に刺さっている二本の小さい針をそっと抜きさえすれば、各々すぐに生き返ります。」賈政はすぐさま黛玉、晴雯の針を抜き、他もすべて抜いてしまった。（第1回）

この2人組がまじないによって魂を奪っていたのだが、彼らの持っていた木の像から針を抜いて生き返らせることができたのである。そしてその後、紆余曲折を経て、第14回では宝玉と黛玉の結婚が成就するのである。『紅樓夢』では、気難しく病弱である故に遠ざけられた黛玉が、ここではむしろ請われて宝玉の妻となり、薛宝釵<sup>(17)</sup>とともに子をなすまでになり、悲恋は撤回される。

ところで、僧侶と道士の2人は、『紅樓夢』では現世と仙界との連絡者であり、宝玉もまた仙界の者の生まれ変わりであったため、黛玉の死を契機に現世の情縁の

罪障を悟らせて仙界に連れ帰るという役割を担っていた。この世の者ならざる飄然とした雰囲気をもっていた彼らも、ここでは狡猾でみじめないかさま師となっている。

そして、『紅樓夢』における賈家の没落は「封建的貴族社会の必然的な腐敗を描いた」として評価されているように、宝玉を取り巻く華やかで豪華な生活の中の、不正が横行し次第に逼迫して行く家計の内情にも筆が及んで行く。後半40回に至って、糾弾を受けた賈家は、財産を差し押えられ世襲職を剥脱されて、急激に没落して行く。しかし、終り近く第119回に至って、すでに復興の兆しを見せている。

賈蘭が奥にはいつてきて、えびす顔で奥方の王氏にこう報告しました。

「奥方さま、まことにおめでとうございます！ [中略] 上のお祖父さま（賈赦）はご免罪になられ、珍の叔父さまはご免罪になられるばかりか、もとどおり寧国公の世襲三等職の襲爵をさし許されるよしにございます。また榮国公の世職はこれまでどおりお祖父さま（賈政）がお継ぎになり、大祖母さまの喪が明け次第、従前どおり工部郎中にご昇任になるよし、さらにまたお召し上げになった家産はすべてご返還いただけますとのことでございます。……」

『後紅樓夢』では、さらに家内の安寧を得るべく、生き返った黛玉の采配によって繁栄がもたらされることになる。そして同時に、『紅樓夢』には登場しない人物が新たに現れてこれに寄与しているのである。黛玉の兄・林良玉とその友人の姜景星がそれで、2人とも科挙(官吏登用試験)に優秀な成績で合格して順調に出世し、賈家と姻戚関係を結ぶ。(第5回、8回、10回等。)さらにそれだけに留まらず、『紅樓夢』におけるあまりにも有名な宝玉の特徴的な性状——男性嫌い（「およそ山川日月の精気は女の子にのみ集中してしまい、むくつけき男子など、せいぜいその残りかすか濁ったあぶくも同然——」、第20回）、立身出世への反発（官吏や官吏志願者への「国賊・禄盗人」なる罵言、第30回）——は、己れのなすべきことを思い出したかのように一変する。この2人との親交によってか、賈家の嗣子である宝玉もまた、出家することなく、子をもうけ、後には官途について立身に励み、家名をおとしめることなく、つまり父母への不孝となるような行動はいっさい慎み忠孝につとめることになる。

このように、『後紅樓夢』は、『紅樓夢』における仙界との関係をすっぱり断ち切って、賈家の社会的・経済的繁栄と家内の安寧というより現世的な幸福の実現に向けて、それを妨害する要素を逐一覆して行ったのだと言えよう。

『後紅樓夢』は数ある〈続書〉のうちのひとつに過ぎないのであるが、このよう

な例を見ることによって〈読者〉の『紅樓夢』に対する反応や受容のありようを明らかにし得るとすれば、〈続書〉群とは、〈読者〉から〈作者〉への果てしない転換の連続として、「ロビンソン物語」のように「メタ・レベル」で物語を紡ぐことも可能かもしれない。実際に、従来の『紅樓夢』研究において顧みられることのなかった〈続書〉に積極的な価値を見出だし得るとした、近年の趙建忠氏の研究では、次のように述べられている。

あらゆる『紅樓夢』続書は、事実上みな原著と後40回の形象に対する文学批評であり、それらを〈小説〉と見るよりはむしろ『紅樓夢』の“評論集”とみなした方がよいのである<sup>(18)</sup>。

このような見解は、現在、〈続書〉を位置付け、意味付ける際の常套的説明となっていると言ってよい。そして、このように見ることは、『紅樓夢』の派生物としての〈続書〉、〈続書〉の存在に意味を与えることができる「起源」「権威」としての『紅樓夢』、を暗黙のうちに承認し前提しているのである。それ故に、これを認めるならば、『ロビンソン・クルーソー』とその〈改作〉群におけるのと同様に、受容-生産の関係を『紅樓夢』と〈続書〉群の上に構築し得ることは疑いを容れないであろう。

しかしそのような試みは、『紅樓夢』及び〈続書〉のテキストそのものによって裏切られかねないことが、白話小説の〈作者〉をめぐる状況に示されていると思われるのである。というのも、そこにはそのような機制が要請する〈author〉とそれが保証する〈authority〉の関係が、逆に欠如として認識されざるをえないような、〈作者〉の不確定性という状況があるからである。

そもそも、『紅樓夢』に限らず中国における〈近代〉以前の〈小説〉を論じる際には、この〈文学〉研究の出発点とも言うべき情報がほとんどないか、あってもあてにならない、という状況に突き当たることがほぼ通例となっていると言ってよい。もちろん、近年の研究はその追求に多大な努力を傾けており、成果も著しいものがある。主要な作品については定説として受け入れられ一般化している場合も少なくないのであるが、未だ決定的とはいえない場合も多いのが現状であると言えよう。

しかし、このことは〈小説〉が無記名で流布したことを意味するものではない。多くの場合、「誰」が書いたのかという「署名」はされていたのである。たとえば『金瓶梅』に「笑笑生」と、あるいは先に見た『後紅樓夢』ならば「白雲外史散花居士」というふうに、明らかに「号」であり、またそれが分かるように付けられて

いる。

中国において、前近代といわれる時期の〈小説〉は、良家の子女が公には読むことを禁じられていたとも言われるような、はなはだ卑しむべきものと見なされていたことがつとに指摘されているジャンルであり、吉川幸次郎氏はその原因を、虚構であること（つまり荒唐無稽であること）とそれが白話という「俗」な文体で書かれていたことに求めている<sup>(19)</sup>。〈小説〉に本名を記す習慣はなかったため、現在に至るまで〈作者〉の判明が困難を極めるものとなっている、とはしばしば言われることではあるのだが、このような〈小説〉の価値・評価の低さから考えるならば、より積極的には、「本当の姓名を書き連ねたいとは思っていなかった」<sup>(20)</sup>、名を記すことを望んでなどいなかったと言うべきであろう。

このように、中国〈小説〉において、署名された「名」とは、韜晦の手段としての匿名性の強いものであったため、その人物の「創造物」としての〈作品〉が帰属し、〈作者〉としての〈権威／権利〉を行使し得るような、あるいはそのように考えられ尊重される「起源」としての〈主体〉という機能を欠いたものと言わねばならないであろう。そのような「名」を〈作者 author〉と呼ぶことは、それが要請する機制のなかでは矛盾にほかならないのである。

『紅樓夢』においては、物語の縁起の部分で曹雪芹の名が纂修者の連なりのうちのひとりとして（多分に諧謔的に）記されており、その「名」そのものは比較的頻繁に読後評などに現れ、〈続書〉がその作者として仮託していることもしばしばであったという。しかし、それがそのまま信じられていたにしてもいいにしても、続編としてのそれが現れたことに対しては、なすべからざる行為として不快を示すよりはむしろ歓迎する気分の方が、〈続書〉への言及においても濃厚だと言えるであろう<sup>(21)</sup>。

「ロビンソン物語」において、それが「物語」として語られ得るために、〈author〉と〈authority〉の関係、そして何よりもそれが顕在化していることが必要なのであり、それはそうした関係性が不在となる状況があってこそ逆に明らかになる、ということをすでに述べたが、『紅樓夢』とその〈続書〉がかつて属していた状況のなかでは、そのような関係性そのものが成り立たなくなって行く。〈作者〉と不可分の〈作品〉や、〈続書〉の起源の位置にある〈原作〉として『紅樓夢』を見ようとする現在の我々の眼差しは、逆にそのありようが歴史化されねばならないものとなることは必至であろう。

### 3 「小なる説」から〈小説〉へ

先にも述べたが、〈小説〉とは、清末に至るまで、更に言うなら今世紀初頭の文

学革命の時期まで、中国の伝統的な〈文学〉規範においては正統的価値をもたない、読んで字の如く「小なる説」、つまり枝葉末節の、取るに足りない話というこの語の出自そのままの、反価値的なもの、低次のものと扱われ、学問的研究の対象となることもなかったという<sup>(22)</sup>。

このような〈小説〉に対して価値付与がなされたのは、〈近代〉以降の、つまり中国における〈民族〉というレベルでのアイデンティティ危機の時代の、非常に自覚的な〈文学〉的価値の転換の要請と連動してのことであった。その過程における西欧の novel との物質的・概念的接触によって、「西洋の文学史、ことに西洋近代の文学史は、小説の尊ぶべきことを教えた。かくて中国の小説も、その文学としての意義が反省されることになった」<sup>(23)</sup>のである。

『紅樓夢』研究におけるそのような価値転換の現れは、早いものとして、王国維が光緒30年(1904年)に雑誌『教育世界』に連載した「紅樓夢評論」が挙げられる。「紅樓夢評論」は当時の風潮にそって小説や戯曲を称揚しており、〈続書〉が「団円」に終わっているのを、悲劇的な物事を嫌う中国人の楽天的な国民性の故であるとし、またこれまでの読者が登場人物のモデルの詮索にばかり熱心で〈作者〉が何者なのか、作品の成立はいつなのかといったことに全く関心を示してこなかったことに悲憤慷慨している。

……『紅樓夢』がありながら、かの『紅樓復夢』、『補紅樓夢』、『続紅樓夢』のたぐいはなぜに作られたのであるか、またなんのために『紅樓夢』を裏返して見せた『儿女英雄伝』が生まれたのか？ [中略]『紅樓復夢』等のごときは、まさしくわが国民の楽天的な国民性を代表するものといってよい<sup>(24)</sup>。

ところで作者の姓名(いずれの書物を当たってみても、曹雪芹とはいかなる人の名か、記したものを見ないが)、作品成立の時期については、この作品の読者として当然知っていなければならぬことであり、主人公の姓名以上に重要なことと思われるのに、考えてみると、これまで一人としてこの点につき考証をした者がいない。これははなはだ理解に苦しむ事実である<sup>(25)</sup>。

この後、『紅樓夢』に関する実証的研究は、1910年代後半の文学革命を経て、胡適の「紅樓夢考証」が作者の伝記の解明と版本研究を行なっている。『紅樓夢』を作者の自叙伝であるとし、後40回が別人の続作であることも示唆している。さらに俞平伯が、曹雪芹と続作者である高鶚とを対比して、前者がはるかに優れている、としている。

こうした流れを見てくると、〈作者〉の決定とその来歴の判明、版本の整理や定本の決定などの「実証的」研究や、原-作者の優位性の証明等は、〈近代〉的〈小説〉観によって、いわば逡巡的に要請されたものと言えなくはないだろうか。そして同時に、こうした〈小説〉観は、〈続書〉に対して否定的な見解を示すようになって行く。すなわち、絶対的優位性に立ち、〈文学〉としての〈芸術〉的価値を備えた、並ぶものなき傑作としての『紅樓夢』の派生的産物として、しかもその結末を原-作者の意に逆らって恣意的に改変した越権行為を糾弾されるべき存在、そしてより劣ったものとなったと言えるのである。種々の文学史における〈続書〉への言及が、このことをよく示していると思われる。

……高鶚続作の後を承けて更に之に継がんとするもの「後紅樓夢」「紅樓後夢」等十數種あると云ふが、御多分に漏れぬ愚作が多からう。(傍点引用者)<sup>(26)</sup>

……『後紅樓夢』『紅樓復夢』など三十種におよぶ続作が作られたが、悲劇を団円に変えるなど見るに足るものはない。(傍点引用者)<sup>(27)</sup>

現在、我々は、〈西欧近代〉に発生し広まった〈小説〉概念を、いわば言説の「地」としている。それは、〈作者〉や〈続書〉を語る際に規範として働く、権力の構造を内包した言説効果とさえ言えるであろう<sup>(28)</sup>。

『紅樓夢』を「前近代の」、あるいは「中国の伝統的な小説観にもとづいて書かれた」〈小説〉と言ひ、「近代の意識に目覚めた作家が、ヨーロッパや日本の近代文学の影響を受けて書いた」<sup>(29)</sup>ものを「近代の」〈小説〉と言うこと、それは一般的に見られるゆえに、そこには〈近代小説〉が普遍的準拠枠として、未だそれに至っていないものが最終的に到達すべき〈文学〉的形態として、無批判に表象されている、とすることができる。近年の『紅樓夢』評価において、それを白話小説の粹として高く評価した上で、そこに〈近代小説〉の萌芽を見ること、つまり〈近代小説〉への発展段階としての白話小説のなかで、〈近代小説〉へと脱皮し得た可能性の最も高いものであったがゆえにその〈文学〉的価値も高い、とするような論が多く見られるのも、そうした機制が機能しているひとつの例であると言えよう<sup>(30)</sup>。そして、『紅樓夢』とその〈続書〉のありようは、現在の我々が〈小説〉を語る際に一義的にそこに帰属させてしまう〈近代小説〉の、規範的内実を露呈する場として提示することが可能である、と思われるのである。

## 注

- (1) このことは西欧・非西欧にかかわらず言えることである。〈文学〉形態としての(つまり制度としての)〈小説〉が、そしてそれを「書く」こと、「読む」営為が、近代の植民地主義と切り離し得ない機制であることを、いわゆる第三世界の〈小説〉実践において明らかにした、次の論が示唆的である——岡真理「Message in a Rolling Pumpkin 応答するということについて」(『現代思想』1997年12月号)
- (2) 18世紀における清代中国の世界史的關係から見ると、『紅樓夢』の成立とその時期が広い意味での〈近代〉的動向と全く孤絶し得ていたとは考えにくい、との識者からの指摘も受けた。管見の限りでは、そうした視点から両者に関連づける試みは(待たれるものの)未見である。
- (3) アーノルド・ケトル 『イギリス小説序説』(小池滋／山本和平／伊藤欣二／井出弘之訳、研究社、1974)、21～22頁。
- (4) マルト・ロベール 『起源の小説と小説の起源』(岩崎力／西永良成訳、河出書房新社、1975)、277頁(原註1)
- (5) こうした現象は『ロビンソン・クルーソー』にのみ現れたものではないが、「『ロビンソン・クルーソー』ほど多くの翻訳・改作・簡略版が出版された物語は他にはない」(岩尾龍太郎『ロビンソンの砦』青土社、1994、20頁)と言われるほどの隆盛をみたものと言える。
- (6) M・グリーン 『ロビンソン・クルーソー物語』(岩尾龍太郎訳、みすず書房、1993) 参照。
- (7) 岩尾、前掲書、27頁。(なお、「能力と気力の祭儀」は、岩尾氏の当該部分では「気分」となっているが、この表現はグリーン前掲書からの引用であり、その際の誤字であるとのことなので、ここでは訂正した上で引用していることを記しておく。)
- (8) グリーン、前掲書、3頁。
- (9) 同書、287頁。
- (10) 同書、106頁。
- (11) 岩尾、前掲書、24頁。
- (12) 正木恒夫 『植民地幻想——イギリス文学と非ヨーロッパ——』(みすず書房、1995)、143頁。
- (13) *The Swiss Family Robinson*, Edited for the use of schools, by J. H. Stickney, Boston, U.S.A.: Ginn & Company, Publishers, 1893.
- (14) *The Swiss Family Robinson; The Adventures of Swiss Pastor and His Family*

*in a Desert Region of South America*, London: The Central School Depot, John Marshall & Co., E. C.; Simpkin & Co., E. C.; Hamilton, Adams & Co., E. C.

- (15) 原文は、曹雪芹『紅樓夢八十回校本』及び『後部四十回』(人民文学出版社、1958)を用いた。訳文は、伊藤漱平訳『紅樓夢』全三冊(奇書シリーズ)(平凡社、1973)に拠った。
- (16) (清)白雲外史散花居士撰 黎戈点校『後紅樓夢』(《紅樓夢》資料叢書・続書)(北京大学出版社、1988)
- (17) 『紅樓夢』で宝玉の正妻となった女性で、ふくよかな容姿に鷹揚な性質という、黛玉とは正反対の人物として描かれているとの指摘がなされている。
- (18) 趙建忠「紅樓夢統書の源流嬗変及其研究」(『紅樓夢学刊』1992年第4輯)、321～2頁。
- (19) 吉川幸次郎「中国小説の地位」、『吉川幸次郎全集』第一巻(筑摩書房、1973)所収。
- (20) 程千帆／徐有富『校讎廣義 目録編』(齊魯書社、1988)、123頁。
- (21) 一例として、仲辰泰『紅樓夢伝奇』(嘉慶3年、1798)「跋」を挙げる。  
「丙辰(嘉慶元年、一七九六)客揚州司馬李春舟先生幕中、更得《後紅樓夢》而讀之大可為黛玉、晴雯吐氣、—————」(一粟編『紅樓夢卷(全二冊)』第一冊(中華書局、1963)、56～7頁。)
- (22) 次を参照。
  - ・ 駒田信二「中国の「小説」概念」、『対の思想——中国文学と日本文学——』(勁草書房、1969)所収。
  - ・ 竹田晃『中国における小説の成立』(放送大学教育振興会、1997)
  - ・ 魯迅「中国小説史略」、『魯迅全集』第九巻(人民文学出版社、1973)邦訳、今村与志雄訳『中国小説史略』(上・下)(ちくま学芸文庫、1997)
- (23) 吉川幸次郎「中国小説における論証の興味」、『吉川幸次郎全集』第一巻(筑摩書房、1973)、213頁。
- (24) 王国維「紅樓夢評論」、『王国維先生全集』初編第五冊(台湾大通書局)、1734～5頁。邦訳は、伊藤漱平訳「紅樓夢評論」、『中国現代文学選集1 清末・五四前後集』(平凡社、1963)、390頁。
- (25) 同書、1753～4頁。邦訳、407頁。
- (26) 青木正児「支那文学概説」、『青木正児全集』第一巻(春秋社、1969)、364頁。
- (27) 前野直彬『中国文学史』(東京大学出版会、1975)、246頁。
- (28) <言説(ディスクール)>について、次を参照。

- ・ポール・A・ボヴェ 「ディスクール」レントリッキア／マクローリン編『現代批評理論——22の基本概念』、大橋洋一・正岡和恵・篠崎実・利根川真紀・細谷等・石塚久郎訳（平凡社、1994）所収。
- (29) 竹田、前掲書（注22）、12頁。
- (30) たとえば、次を参照。
- ・井波陵一「白話小説史に於ける《紅樓夢》の位置」（『東方学報（京都）』第 五十五冊、1981）
  - ・小山澄夫「紅樓夢 情から不合理へ」伊藤漱平編『中国の古典文学——作品選読——』（東京大学出版会、1981）所収。
  - ・F・テーケイ「家父長制的家庭を描く——『紅樓夢』——」、『中国の悲歌の誕生 屈原とその時代』、羽仁協子訳（風濤社、1972）所収。